解像度は"1600×1200"

イラスト(CG)+ノベル

doujin circle
とらや

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の購入・閲覧禁止

この素晴らしい状況に感謝を!2

KONO SUBARASHII JYOUKYOU NI KANSYA WO!

第2弾
魔法少女と
クルセイダーの
2本立て!!

――あらすじ
数ヶ月前。
カズマはめぐみんとの日課(爆裂魔法)の後に
性関係を持つようになる。その関係は現在も
続いており、ほぼ毎日行われていた。

「くそっ。今日は日課に行けなかったな…
最近の楽しみだったのに……」

「あ!?かっカズマじゃないですか」
「おっめぐみん。今日は日課を手伝えなくて悪かったな」

「ダクネスに付き合って貰ったので大丈夫です」
「そうかそうか。けど、もう一つの日課はどうしたの？」
「う、うるさいです!! 今日は疲れたので風呂に入ってきます」
「明日は手伝って下さいよ……」

そう言うとめぐみんは
そそくさと行ってしまった――

（風呂か……）

（今日はめぐみんを抱いてないし
俺も風呂場へ突入するか？）
（いやけど屋敷内でやるのは……）
――などと考えているといつの間にか
脱衣所の前に立っていた

（心は正直だ。これは突入するしかない）

「……んっ…ふぅ…っ…ぁぁ…」

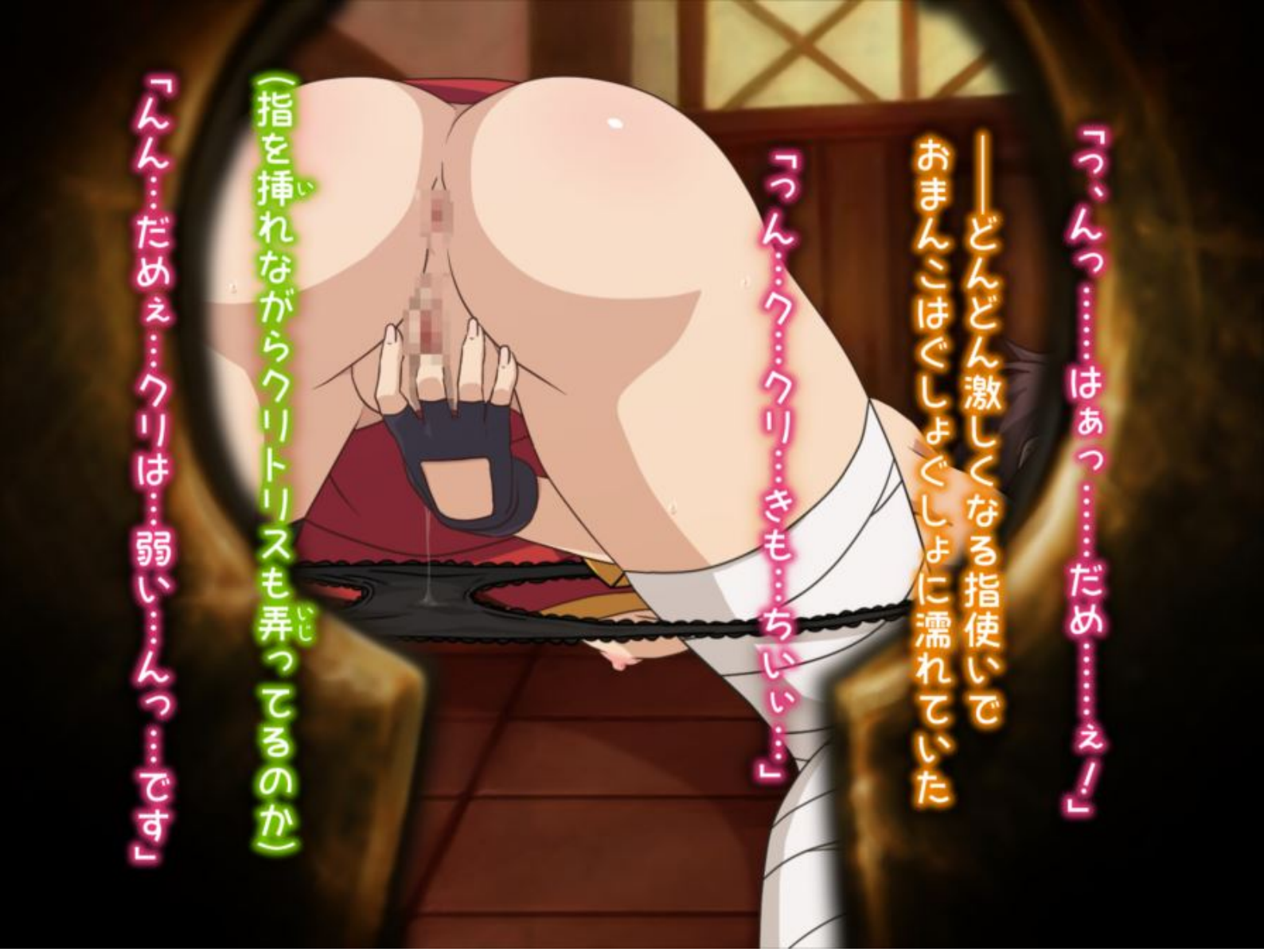
（んっ？何か聞こえるな…）

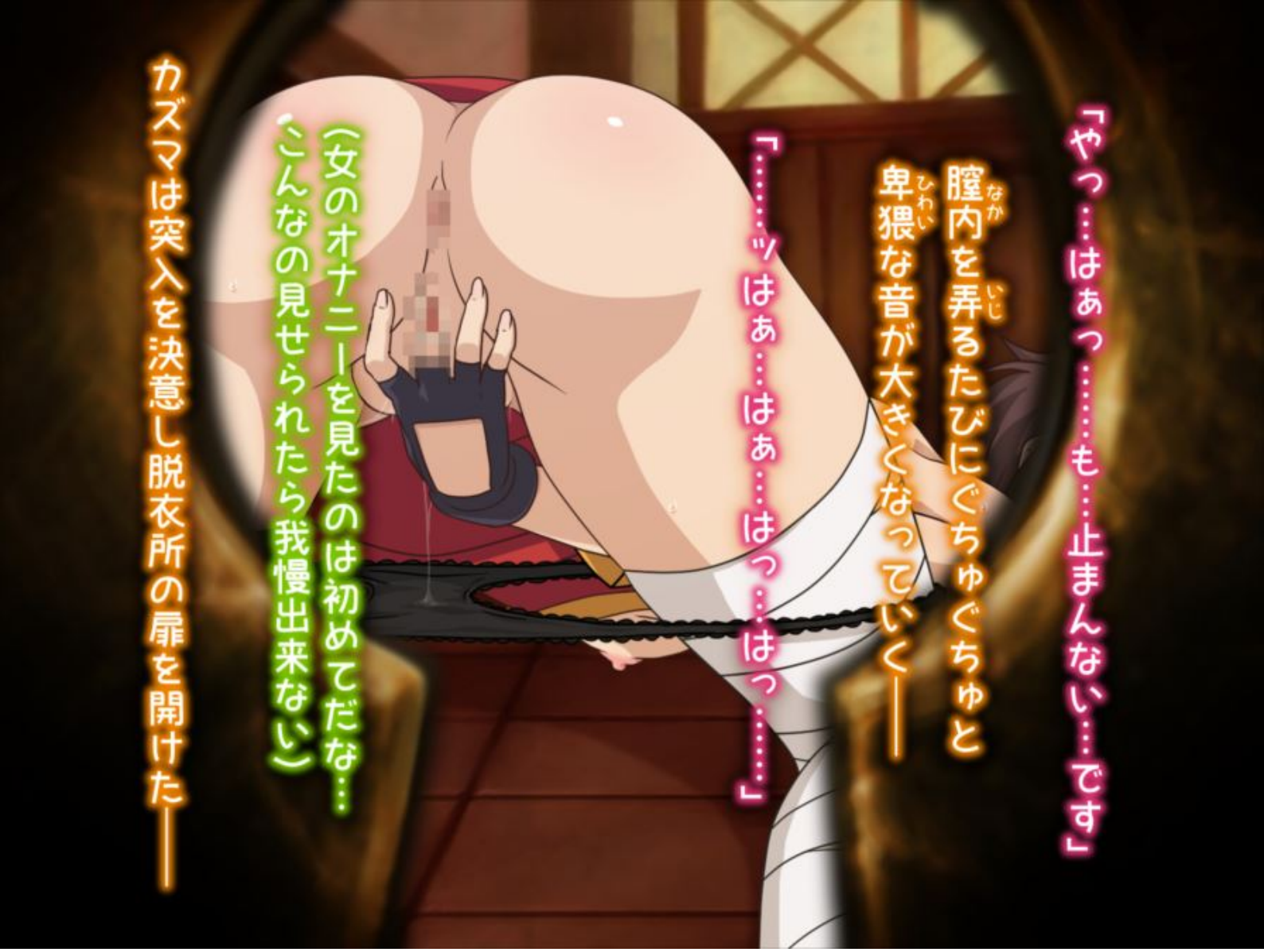
「ん、んっ…ふぅ…っぁ…はぁ」

脱衣所の中から押し殺してはいるが微(かす)かに喘(あえ)ぎ声が漏れて聞こえてくる――

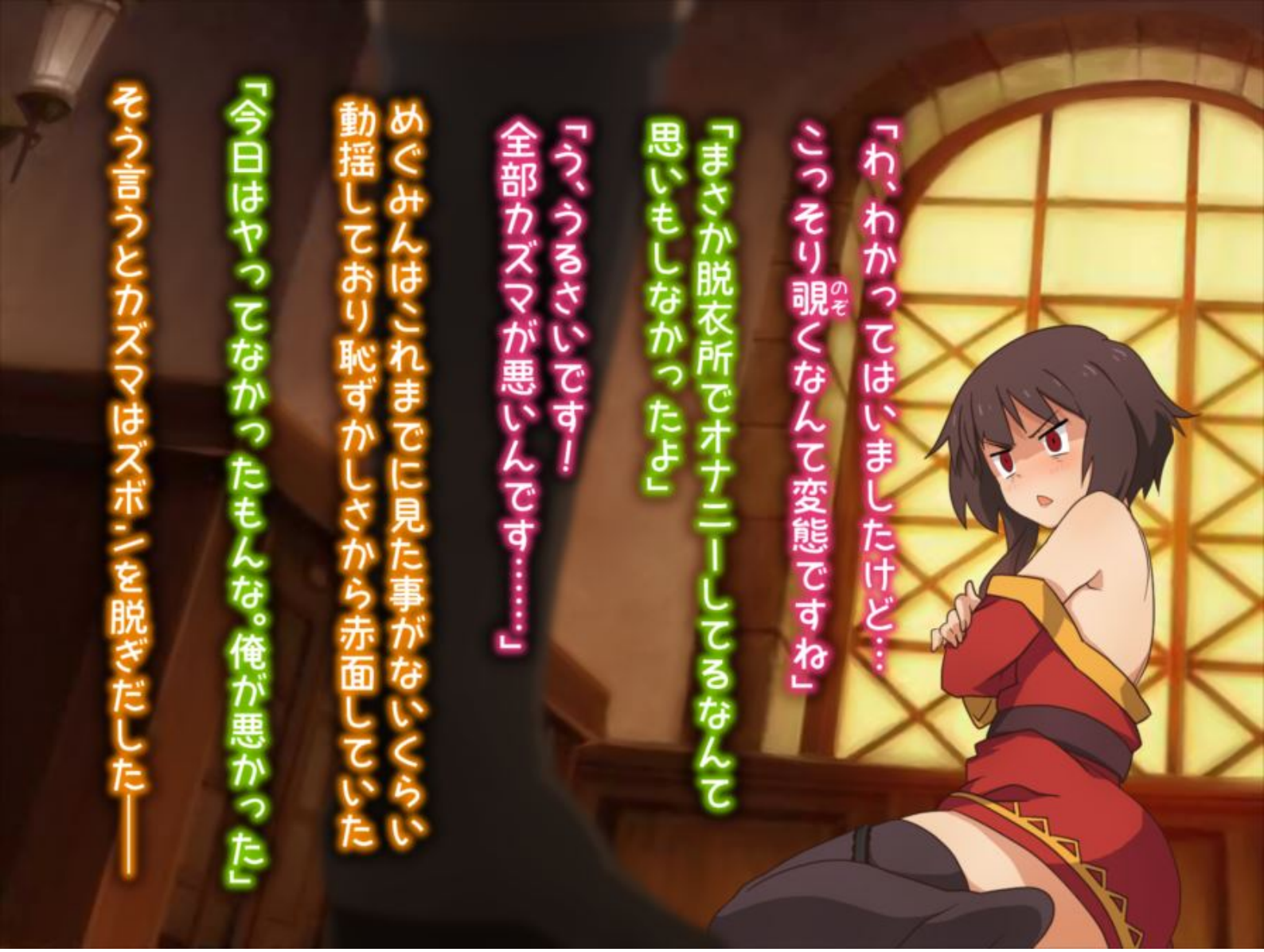
「うっ……ん……あ……っぁ……ん」
（これは、もしかして……）
カズマはゴクリと息を呑むとそっと
鍵穴から中を覗（のぞ）き込む――

「あ、はぁ…ぁ、ん…ん、もうっ…」
（まじか。オナってるし……）
「んっ…ん、そこ…っん…だめ」
「……っ…う…ぁ…」
めぐみんはくちゅくちゅと音を立てながら
オナニーをしていた――


「っ、んっ……はぁっ……だめ……ぇ！」
——どんどん激しくなる指使いで
おまんこはぐしょぐしょに濡れていた
「っん…ク…クリ…きも…ちいぃ…」
（指を挿れながらクリトリスも弄ってるのか）
「んん…だめぇ…クリは…弱い…んっ…です」


「やっ…はぁっ……も…止まんない…です」
膣内を弄るたびにぐちゅぐちゅと
卑猥な音が大きくなっていく――
「……ッはぁ…はぁ…はっ…はっ……」
(女のオナニーを見たのは初めてだな…
こんなの見せられたら我慢出来ない)
カズマは突入を決意し脱衣所の扉を開けた――

――ガチャ。
「ぎゃあああぁぁぁぁ!!」
「馬鹿！声がでかい!!」
慌てて扉を閉め、めぐみんの口を塞ぐ
「あっぁ…の…いつから見てました？」
「最初の方からずっと見てたよ」


「わ、わかってはいましたけど…
こっそり覗くなんて変態ですね」
「まさか脱衣所でオナニーしてるなんて
思いもしなかったよ」
「う、うるさいです！
全部カズマが悪いんです……」
めぐみんはこれまでに見た事がないくらい
動揺しており恥ずかしさから赤面していた
「今日はヤってなかったもんな。俺が悪かった」
そう言うとカズマはズボンを脱ぎだした――

「なっ…な、何をしてるんですかぁぁ!?」
「何って……?何時(いつ)もやってる事じゃない」
オナニーを覗(のぞ)かれて動揺している
めぐみんを押さえつけ、ちんぽを押し付ける
「わ…私にこ」で舐めろというんですか?」
「その通り。今日の日課も終わらせないと
発育勝負に負けるぞ?」
カズマはまだ少し抵抗のあるめぐみんの
口に無理やりちんぽをいれて
フェラチオを開始する――

「ん…んん…んぐ…っんんん」
「んんっ…口の中気持ちいいぞ…」
勃起したちんぽを口の奥まで咥えさすと
そのまま腰を止める
「そのまま舌で舐めてくれるか？」
「んっ…くちゅ…ふ…っんむ…ん」
日課の性行為で様々な体験をしためぐみんは
命令に従い丁寧に舐めてくれた――

「よし。このまま口の中に射精すぞ」
「んん…っん……ん」
めぐみんは少し嫌がるように顔を振るが
カズマはお構いなしに腰を動かす――
「んっ……んぐっ…んふ…んん」
「ん…ちょ…カズマさ…ん…んぐ…
待って…んふ…ください……」

「我慢してくれ。もうすぐ射精るから」
そう言うと激しく腰を前後させる――
「んふ…は、はげし…い…ん…っん」
「んぐっ…ん…んふ…っん…んん」
「んっ…んっ…んん…っん…んっん…ん」

「んんっ!?んぐ……んっん…ん」
カズマはそのまま口の中に勢い良く射精する
「んぁ…悪い…射精しちまった」
「ん…んぐ…ぢゅる…んん…もう……」

「んん…ひどいじゃないですか…」
「…口の中は嫌だっていってるのに…」
「悪い悪い。このまま一緒に風呂に入るか」
「うう…仕方ありません……わかりました…」

一緒に風呂に入るとカズマはめぐみんの
肩に腕を回し囁く――
「屋敷でやるのは初めてだな」
「あ、当たり前じゃないですか…アクアさんと
ダクネスさんにばれたらどうするんですか…」
「まぁな。けど風呂場なら大丈夫だろ」

恥ずかしさから固まっているめぐみんの
おっぱいを揉みながら話を続ける――
「それにばれてもあの二人なら大丈夫だって」
「そ、そうかもしれませんけど……」
「それにこのままじゃ終われないよね？」

「…挿れる前にフェラで勃たせてよ」
めぐみんを座らせるとタオルを取り
顔の前にちんぽを差し出す――
「んんっ……また舐めてほしいんですか…
しょうがないですね…」
少し抵抗はあるが嫌がる様子もなく命令に
従うめぐみん

「ふぅん、ううん…んっ」
カズマのちんぽを右手で握ると舌で竿の部分を舐め上げフェラチオを開始する
「んっ…随分上手くなったな…」
「んっ……んふ…ん…っんん」
手で軽くシゴかれながら舐められる事で気づくとカズマのちんぽは勃起しており先走りの汁が少し出ていた――
「もう、大きくなってきましたね…」

「んぐっ…ん…んぐ…んっんんん」
めぐみんは不意打ちとばかりに
勃起したちんぽを口の奥まで咥えこむ
「んんっ…驚きました？気持ちいいですか？」
そんな台詞を言っているかのような
上目遣いでこちらを見ながら口の中では
舌を動かしてくる

（いつもより積極的だな。
オナニーを覗かれて発情しちゃったかな…）
「んん…っん……ん」
「んっ……んぐっ…んふ…んん」
普段より激しいフェラチオの刺激で
カズマのちんぽはさらに硬くなっていく

「んっ…くちゅ…ふ…っんむ…ん」
「う…めぐみん気持ちいいよ…」
「んふ……ん…んぐ…んっん」
口の中はとても暖かく、さらに深く咥えてくる
「んっれろっ…ぢゅる…気持ち…良い…？」

「んぐっ…ん…んふ…っん…んん」
「んっ…れろっ……どうですか…？」
「あぁ…最高に気持ちいい」
「んっ…んぐ…んん…ぢゅる…んん」
（けど、もうそろそろ挿入れたいな…）
「めぐみん、もういいよ。次はそこに手をついて」

言われたとおりに手をつきお尻をこちらに
突き出すとおまんこはもうぐしょぐしょに
濡れていた――

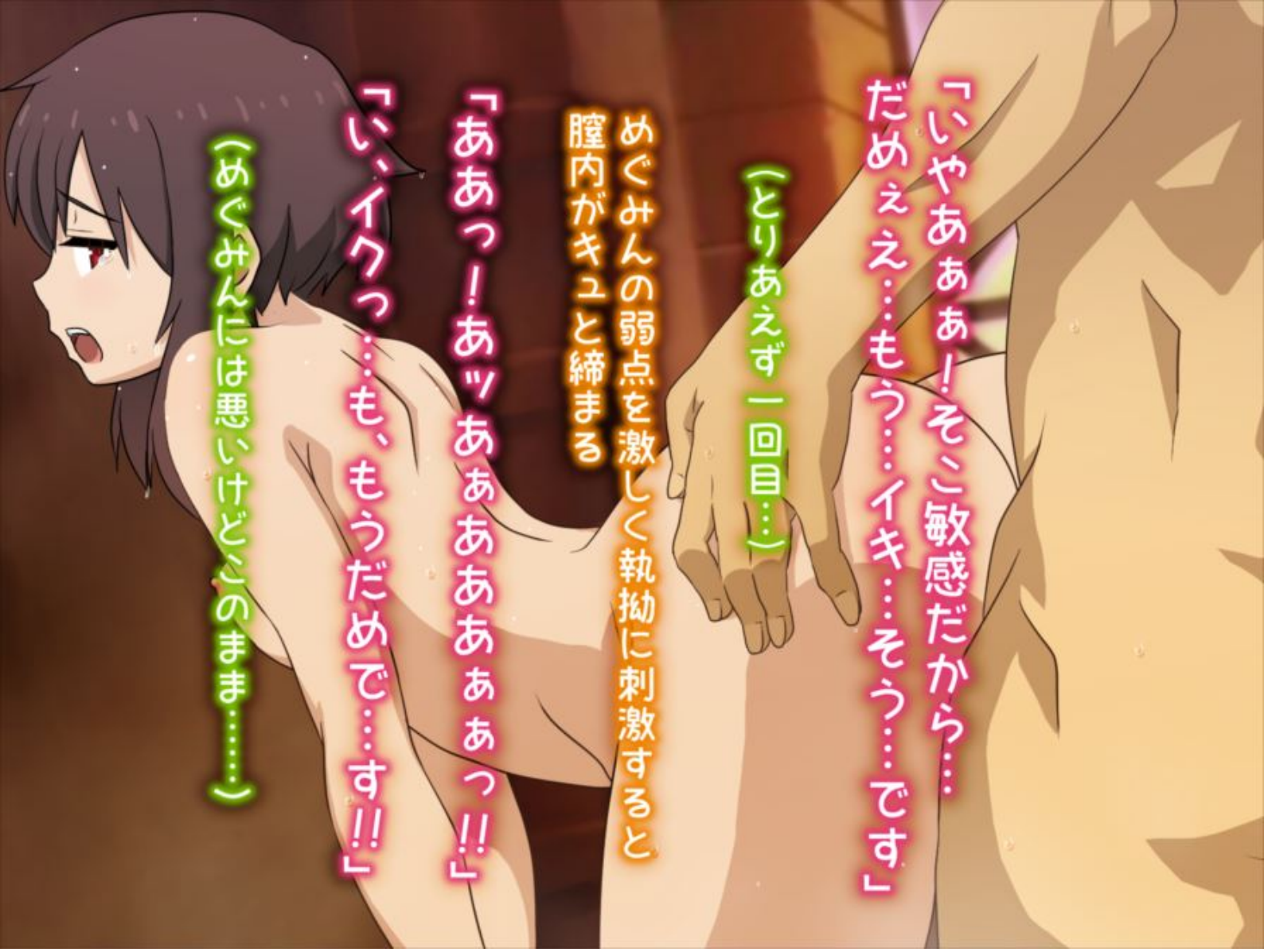
「もう、十分濡れてるな」

「そ、そんなこと言わなくていいです」

「これを挿入れてほしかったんだろ？」
ちんぽを入り口に擦って愛撫する
「そういう身体にしたのはカズマじゃないですか」
何度か擦るとお尻を動かしてめぐみんも求めてくる
（めぐみんもエロくなったもんだ……）
「よし、挿入れるぞ」

合図とともににバックから一気に貫く――
「あぁっ……い……いっ！」
「ひゃああ…ん…ああっ」
（挿入れた途端、締まったな…）
「んああっ…かた…い…い……」

「あっ……あっ…そこだめ…っです」
（めぐみんはここを突かれるの弱いんだよな）
「やっ…ぁ…そこダメぇ…そこばかり…突くなぁ」
（少しいじめてやるか…）
「ひあっ！だ…から…やあああぁぁっ…
そこばかり…擦る…な…ぁ」


「いやあぁぁ！そこ敏感だから…
だめぇえ…もう…イキ…そう…です」
（とりあえず一回目…）
めぐみんの弱点を激しく執拗に刺激すると
膣内がキュと締まる
「ああっ！あッあぁあああぁぁっ!!」
「い、イクっ…も、もうだめで…す!!」
（めぐみんには悪いけどこのまま……）

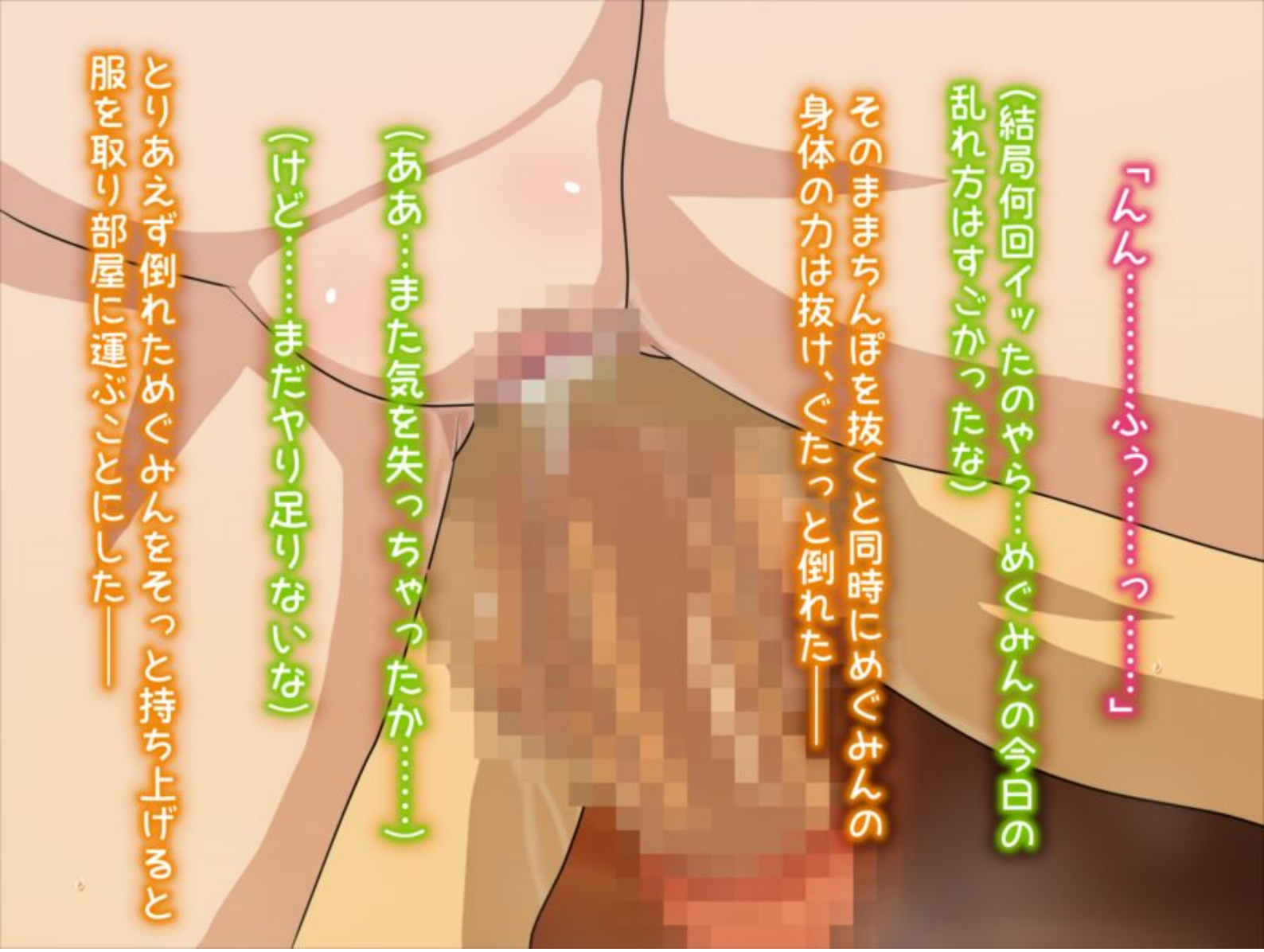
「ちょ、ちょっとカズマさん!?」
片足を持ち上げるとさらに激しく腰を振る
「だめぇぇ…!!ま、待ってください」
(この角度やばいな…これならいけそうだ)
「んっやぁ…あっあああっあっ……あ」

「あっ!!んっま、まだ…まだで…すか?」
「ん…ダメ…ダメ…そこダメ…で…す」
(ん?またイキそうなの?)
「んっあっ、ああっ……
くっあっあっ、あっッ、ああっ!」
どんどん激しくなるピストンで愛液が溢れ
めぐみんは自分から腰を振りだす――

（っん!!こんな気持いいの始めてだな…）
「んん…やぁっ!!奥…やば…いです」
「はぁやぁ…膣内(なか)が擦れてぇ…あっああ…」
（自分から腰振っちゃって…俺もラストスパート）
「やぁん…す…すご…い…んあぁぁ」

「ああっ…くっあっあっあっッあああぁっ！」
「カ…カズマ…おかしく…な…る…んんっ」
「そろそろイクからな」
「んっやぁ……は…い…また…くるぅ…」
「……っちゃう…あッあッあああぁぁッ」

「んふぅぅぅぅ……んんんっんッっ」
カズマは膣内の一番奥に挿入れたまま射精をし腰を止めた――
（気持ち良すぎて中出ししちゃったな…）
「んっはぁ…な…か…あつ…い……」
「きょ…今日はすごかっ…た…です…んっ」


「んん……ふう……っ……」
（結局何回イッたのやら…めぐみんの今日の乱れ方はすごかったな）
そのままちんぽを抜くと同時にめぐみんの身体の力は抜け、ぐたっと倒れた――
（ああ…また気を失っちゃったか……）
（けど……まだヤり足りないな）
とりあえず倒れためぐみんをそっと持ち上げると服を取り部屋に運ぶことにした――

（このまま寝ているめぐみんをもう一度…
というのもあれだしな……）
（あっ!!そういえば今朝バニルに頼んでおいた
新商品が届いたんだった）

（あの商品…試したいな……）
（となると……ダクネスしかいない）
意を決したカズマはめぐみんを部屋に運ぶと
商品を握りしめダクネスの部屋に押しかける――
フハハハハハッ!!
これは最高の一品である!!
この傑作を是非試してほしい!!

「ダクネス!!ちょっと時間いいか!!」
「ん?こんな時間にどうしたカズマ?」
「もしかして……
ついに夜這いをする気にでもなったのか?」
「ふふふふ……」

「その通りだっ！ドレインタッチ!!」
「んぎゃああっ!!
カズマぁお前…気でも狂ったかぁ!?」
「ふふふ…何を言ってるんだ？お前はずっと
これを待ち望んでいたんだろ？」
「だから…こういう事ではないと…言ってるだろ。
それに力で私に勝てるとでも？」

「って…なんだこれは…？ち、力が出ない!?」
「ふはははは。実は、この時のために
ドレイン/タッチのレベルを上げたからな」
「くぅぅ…さすがだ……
やはりお前は本物の変態のようだ……」

ドレインタッチで体力を奪われたダクネスは
ドサッと床に崩れ落ちた――
「そ、それで一体私に何をするつもりなんだ…？」
「実はバニルに頼んでおいた商品が届いてな…」
「商品…？一体それはなんなのだ……
も、もしかして……ふひっ」
（こいつ実はいつもの如く喜んでるな。
まぁいいか…とりあえず服が邪魔だ……）
「スティール!!」

「なあああぁぁぁぁアッッ!!」
「な、なぁカズマ…
や、やはりこういう事はマズイんじゃないか?」
「何をいまさら……本当はずっと待ってたくせに。
それに抵抗できないだろ?」
「スティール!スティール!!」

「ダクネスお前…凄くやらしい下着つけてるな」
「う、うるさいっ!!お前もしかしてまたサキュバスに操られてるんじゃないのか?」
「うん、そうだね。操られてるから仕方ないね」
「いやっ。お、お前正気だな!!ってカズマ。その手に持ってるものはなんだ!?」

「これがバニルに頼んでおいた大ヒット間違いなしの一品〝バイブ〟だ」
「お前その形はもしかして……」
「この世界は電池がないからな。魔力で動くようにしてもらったんだぞ」
「お前が何を言ってるのか理解出来ないがまさかそれを挿入れるつもりなのか…？」
「察しがいいな。お前が想像も出来なかったものだろぉ？」
「いくぞっ!!」

「そおい!!」
「んにゃあぁぁっ!!」
「はぁはぁ…こんな太くて硬くて大きいのを
い、いきなり挿入れるなんて……」
「これをズブズブすると気持ちいいだろ?」
「ひゃあぁぁ…んっんん…やぁ…
こ、これ…は…しゅ…しゅごい……」
「そしてスイッチオンと」

ヴッ……ヴヴッ……
「うひゃぁあぁぁあんっ!!」
ヴヴッ……ヴヴッ……ヴヴッ……
「ひゃぁはぁ…ねっ…ねぇ…んはぁ…
な、なに…これぇ……」
「完璧な出来だ。これなら大量生産いけるな」

「あぁっん…くっ…ふぅ!!」
ヴッ……ヴヴッ……ヴヴッ……
「くぅ…こ、こんな格好で…こんな道具で私はイッてしまう…のか……そ、それも悪くはないが…そろそろ……」
「やっぱりお前、楽しんでるだろ?」
「はぁんっ…ち、違う…それに…も、もう十分試しただろ?と、止めてくれないか?」

「な、何でお前は胸を揉んでるんだ？
早くバイブを止めてくれ…」
ヴッ……ヴヴッ……ヴヴッ……
「それにしても、けしからんおっぱいだ」
「んんっ…商品を試すだけじゃないのか…
んやぁ…お前…本気なのか……」
「はぁあぁぁっ!!
もういいだろ…や、やめてくれ」
「なんだダクネス。お前イッてるのか？
けどお前が何回イッても
塩噴いても止めるわけないだろ？」

「くふうう…さすがカズマ…酷すぎる」
ヴッ…ヴヴッ……ヴヴッ……
「ふふふ…ずっと前からこのおっぱいを弄り倒したかったんだ」
「はあっくぅ!!やめろぉぉ!!」
バイブで勃起したダクネスの乳首を舐めまわしながらカズマはおっぱいを好き放題に弄り回す――

「んんっ…下も上も攻められて…
だめぇ……しゅごしゅぎるぅ……」
ヴッ……ヴヴッ……ヴヴッ……
「んあぁっ!!も、もうさすがに駄目だ…
下も上も敏感になって…る……」
ダクネスの身体がビクンビクンと痙攣しだすが
カズマは一向にやめる様子はなかった――
「お、お願いだカズマ…も、もう簡便してくれ」

「ん～仕方ないな」
ヴッ……ヴヴッ……ヴヴッ……
「お、おい…早く止めて…抜いてくれ」
口では止める素振りをするがびくんびくんと
跳ねる身体を見ながら愛撫を続ける――
「いやぁぁぁ!!き、貴様いい加減に…」
「わかった。わかったよ。
それじゃバイブは抜いて俺のを挿入れてやる」

「はぁ!?お、お前…正気なのか…?」
「俺は今サキュバスに操られてる設定だから」
「ど、どっちでもいいから…
これ以上はさすがにマズイだろっ!!」
「この前は俺の子供がどうとか言ってたのに
本番になったら怖じ気づくのかな?」
「あ、当たり前だろ!!」
「まぁもう遅い!俺の方が我慢の限界だ!!」

「うひぃぃぃっ!!」
「はぁっん…ほ、本当に挿入れるなんて……」
「んん…挿入れられた感想はどうだ?想像と違うだろ?」
カズマはパンパンとダクネスの弱点を探るように腰を振り続ける――
「んっ…はぁぁぁぁぁ…んっんっ」
「なんだ?返答もできないくらい感じてるのか?」

「う、うるしゃい…」
「ん…やっ…お、お前…こんな事して責任…と、とってくれりゅのか……」
「ん…もちろん。これから毎日俺がイジメてやるから、安心していいぞ」
「ま、毎日こ、こういう事するつも…り…なにょか……やぁ…ん…」
「ああっ。どんどん激しいプレイにしていくからな。期待しとけよ」

「ん…やぁ…どんどん…激し…く……」
「くはぁあぁぁぁ…こんな、想像以上の…快楽を……毎日……」
「んふぅうっ…あッあッあッあァァァッ!!」
ダクネスの身体が大きく仰け反る――
「ああ、そうだ。それにお前が何回イこうが俺が満足するまでは終わらないからな?」
「そ、しょんなぁ……んやあぁぁあァァッ」

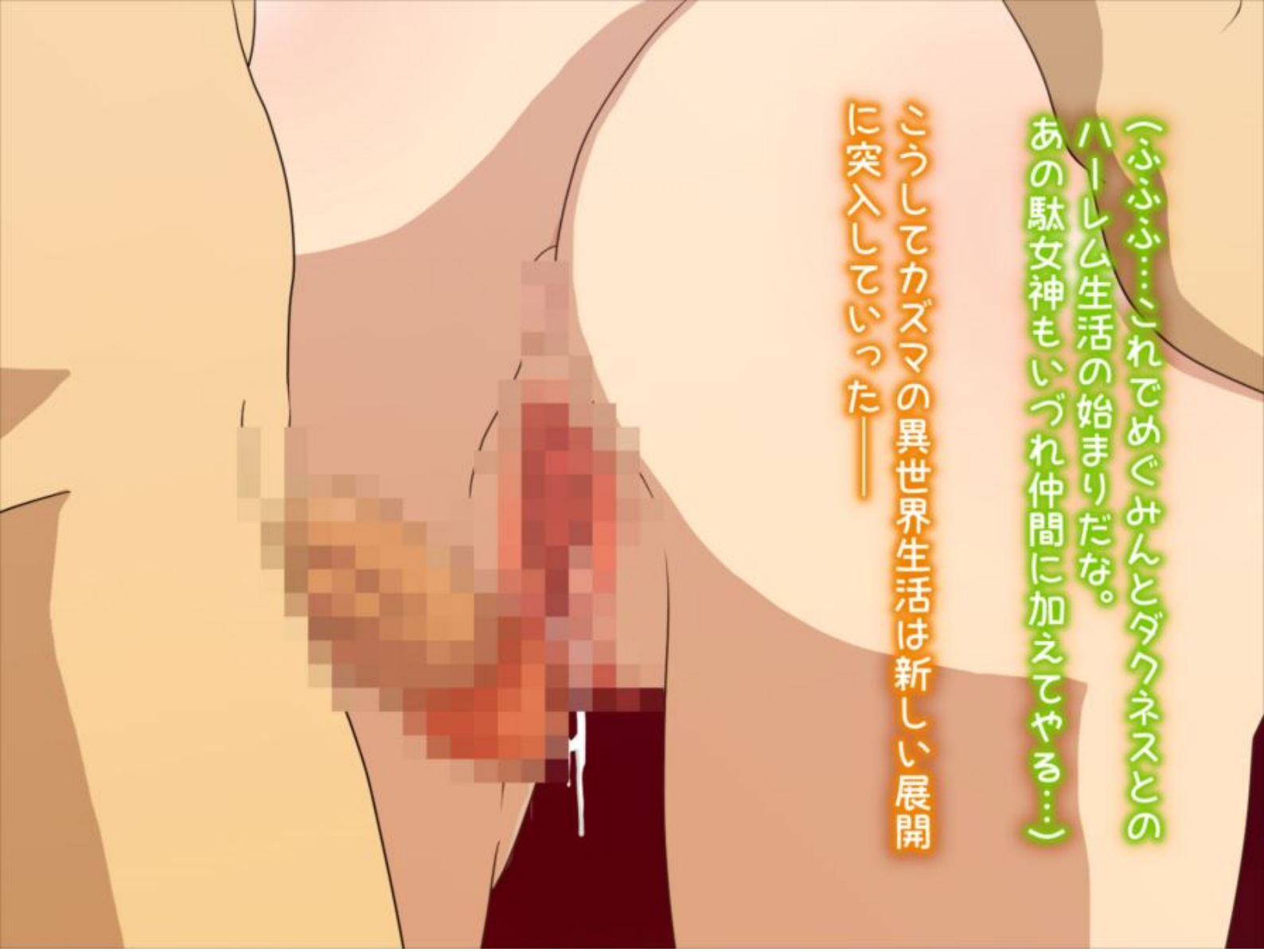
「あっ…う…だめっ…だめ…そんなに…突くな」
「んっ…だっ…め…あそこ…が…おかし…く」
「あそこってどこだ？ちゃんと言うんだ」
「くぅふぅ…お、おまんこで…す」
「お、おまんこが気持ち…いいんで…すぅ」
「よし、良く言えたな。
これから俺の命令には従うんだぞ」

「うはぁあぁぁぁぁっんん!!」
「は、はい…も、もっと…カズマのちんぽでいじめて…ください」
(はは……こいつ本性出てきたな)
「はぁ…んぐっ…はぁぁぁっ…」
「ダクネス、奥が気持ち良いのか?」
「んっ…はい……
ち、ちんぽで奥を突かれるのが…好きぃぃ…」

「あっ…もうだ…め…ぇ…
あぁッあッあッあああああアアアアッ!!」
「なんだ。奥を突かれてまたイッたのか?」
「やぁ…はい…ま、また、イッてしまいましたぁ」
「凄い締め付けだ…
だけど、もっと締め付けて俺をイカせろよ?」
「は…い…はい…頑張りますぅ…んんっ」

「んふぅ…私のおまんこ…どうですか…？」
「あぁ…すごい気持ち良いぞ。もうすぐイクからお前もイケよ」
「んっ…はい…また…イキますぅ」
「よしっイけ！またイけ!!」
「イク、イッちゃうっ…んやぁあぁぁ!!またイくぅぅぅ」
「だあぁメえぇぇぇエエエエッッ!!」

「んやあぁぁっ!!な、膣内にでて…る…」
「もう一度言うが
これから俺の命令には絶対に従うんだぞ?」
「は、はぁい…カズマさ…ま」


（ふふふ…）これでめぐみんとダクネスとのハーレム生活の始まりだな。
あの駄女神もいづれ仲間に加えてやる…）
こうしてカズマの異世界生活は新しい展開に突入していった――

あとがき

お買い上げありがとうございます。
「とらや」と申します。
アニメの第2期も終わってしまいましたが、
最後まで楽しく拝見しておりました。
めぐみんオンリーで描こうと思っていましたがダクネスも大好きなので
今回、2本立てにしてみました。アクア様は
また別の機会にと言う事で…。
めぐみんとダクネス。カズマとアクアを
また見たいので是非第3期やってほしい!!
今回も色々な作品を参考に制作しましたが
新しい発見や試みもありで次に活かせれば
と思っております。
次回作も宜しくお願い致します。